

臨地実習を通じた「地域で生活する妊産褥婦および乳幼児  
とその家族への援助」に関する学生の気づき  
—小児看護学領域と母性看護学領域の視点からの分析—

小川 佳代\*, 植村 裕子, 榮 玲子, 舟越 和代, 三浦 浩美, 松村 恵子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

**Student Nurses' Findings about Support of Pregnant, In-Childbirth and  
Confined Women, Babies and Infants, and Families in Community through  
Practice: Analysis from Viewpoints of Pediatrics Nursing and Maternal Nursin**

Kayo Ogawa \*, Yuko Uemura, Reiko Sakae, Kazuyo Funakoshi,  
Hiromi Miura and Keiko Matsumura

*Department of Nursing, Faculty of Health Sciences,  
Kagawa Prefectural College of Health Sciences Kagawa Prefectural College of Health Sciences*

**Abstract**

Free-description reports of student nurses after practice of "Practice of home nursing II" were analyzed and their findings about support of pregnant, in-childbirth and confined women, babies and infants, and families in a community were classified into 12 categories: (1) role of nursery school teachers, (2) understanding of babies and infants, (3) role of midwives, (4) functions of maternity-nurse centers, (5) functions of day nurseries, (6) relations wherein individuality is esteemed, (7) roles of facilities in a community, (8) roles of professionals, (9) comparison with hospitals, (10) supporting one another in a community, (11) mothers' anxiety in child care, and (13) role of nurses.

With the cooperative assist of teaching staff both of pediatrics nursing and maternal nursing, the student nurses' understanding how to support children, mothers, and families in a community was deepened, and then the student nurses, could give a profound consideration for them.

**Key Words:** 看護学生 (student nurses), 地域 (community), 臨地実習 (practice) 小児看護学 (pediatrics nursing), 母性看護学 (maternal nursing)

\*連絡先: 〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 小川 佳代

\*Correspondence to: Kayo Ogawa, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

## はじめに

本学短期大学の看護学教育課程では、「地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護」に関する学習は、カリキュラム上「在宅看護学実習Ⅱ」として位置付けられている。小児看護学領域では、乳幼児が家庭や地域の中で生まれながら、成長発達していくことの重要性と支援の方法を学ぶことを目標とし、母性看護学領域では、生命の誕生期を中心とした胎児期から新生児期と母を中心とした家族への援助について学ぶことを目標として、保育所と助産所における臨地実習体験を設定している。

地域で生活する乳幼児と母親への看護は、対象者のライフサイクルと発達課題を理解し、その折々でどんな支援が必要かを考えることが重要となる。そこで、「在宅看護学実習Ⅱ」の各施設での実習体験を通して、個々の学生が何に気づき、何を理解したかを把握し、「在宅看護学実習Ⅱ」の目指している実習目的が到達できたかどうかを分析する必要があると考えた。

## 目的

「在宅看護学実習Ⅱ」で設定した各施設での実習体験を通じた学生の気づきや学びを分析することによって、実習目的が達成されたかどうかを明らかにする。

## 対象および方法

1. 対象者：平成17年度「在宅看護学実習Ⅱ」を履修した短期大学3年生45名。
2. 調査内容及びデータ収集方法：「在宅看護学実習Ⅱ」の実習5日目の学内実習に集合した時点で、「地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護について学んだことを、自由に書きなさい。」という問いを記載した用紙を配付した。時間は30分程度を目安にした。本研究の分析対象として用いることの了承を得て回収した。
3. 分析方法：記述されたものを全てデータとして用い、1内容1項目として意味内容によってコード名をつけ、カテゴリーに分類した。コードとカテゴリーの命名は、筆頭著者が行った後、研究者全員で確認し、納得の得られるまで協議

して決定した。その作業は、内容の妥当性の確保のために、カテゴリー名と個々の生データの内容を常に両方を並べて確認しながら行った。

4. 倫理的配慮：学生の記述はプライバシーを配慮した設定で実施した。データの回収に当たって、学生には、研究の目的および個人のプライバシーは厳守し、無記名であり、実習評価には関係しないこと、強制ではなく断わってもなんら不利益は生じないことを文書と口頭で説明し、同意書へのサインで研究協力への同意を確認した。

## 結果

学生の同意を得て、45名分の記述について分析した。得られた605の総項目を、内容によって帰納的に分類した結果、【1. 保育士の役割】、【2. 子どもの理解】、【3. 助産師の役割】、【4. 助産所の機能】、【5. 保育所の機能】、【6. 個別性を配慮した関わり】、【7. 地域の中の施設の役割】、【8. 専門職の役割】、【9. 病院との比較】、【10. 地域で支えあう】、【11. 母親の育児不安】、【12. 看護者の役割】の12のカテゴリーとなった(表1)。

以上は、項目数の多い順に記載した。上位の1から5のカテゴリーは、保育所と助産所の施設の機能と、それぞれ関わった保育士と乳幼児や助産師の役割であった。また、下位の6から12のカテゴリーは、両方の施設とそこにいる人々との関わりを通して、地域全体を視野に入れた内容であった。そのうち、項目数は少なかったが、【10. 地域で支えあう】には、「地域で生活する子どもと家族への援助」や「学びあう」などの記述も見られた。

## 考察

本学は、教育理念の特性として在宅看護の分野の充実を挙げてきた。それは、全国的に少子高齢化が進む中で、本県は特にその数値が全国平均を上回り、今後いかに活力を維持していくかが重要な課題であり、在宅分野の充実が求められていたからである。そこで、開学当初より指定規則単位を上回る「在宅看護学実習Ⅰ」と「在宅看護学実習Ⅱ」で計4単位を設定し、教育に当たってきた。その実習のねらいの達成状況について明らかにす

表1 学生の記述内容のカテゴリ分類結果 n=605

上位カテゴリ	下位カテゴリ			
1. 保育士の役割 96	1) 家族と一緒に子育て	35		
	① 親との情報の共有	(22)		
	② 家庭訪問	(4)		
	③ 母親としての関わり	(3)		
	④ 家族みんなと子育て	(3)		
	⑤ 家族との信頼関係	(2)		
	⑥ 相談相手	(1)		
	2) しつけをする	19		
	① 母親の代わりにしつけをする	(11)		
	② しつけのポイント	(8)		
	3) 成長発達に応じた関わり	16		
	4) 保育方法の工夫	15		
	5) 安全への配慮	7		
	6) 観察と指導	3		
7) 保育士自身の健康	1			
2. 子どもの理解 92	1) 子どもの特徴	40		
	① 一般的な乳幼児の特徴	(23)		
	② 成長発達や年齢による特徴	(14)		
	③ 後の人生に影響	(2)		
	④ 子どもは日々成長している	(1)		
	2) 保育所での過ごし方・生活	17		
	3) 社会性を身につける	14		
	4) 子どもの興味のあるもの	11		
	5) 子どもは集団生活の中で学ぶ	10		
	3. 助産師の役割 88	2) 妊娠・分娩・産褥期の健康管理	35	
		① 相談・指導	(15)	
		② 家庭訪問	(13)	
		③ 健康診査	(7)	
		1) 子育て支援	25	
① 信頼関係		(11)		
② 母子への支援		(9)		
③ ピアサポート作り		(5)		
3) 母乳育児支援		16		
① 母乳育児確立に向けたケア		(6)		
② 乳房ケア		(5)		
③ 食事指導		(5)		
4) 精神的支援		12		
① じっくり関わる		(10)		
② 精神的ケア	(2)			
4. 助産所の機能 86	1) 助産所の雰囲気	14		
	2) 地域に根ざした助産所	13		
	3) 家族と一緒に出産	10		
	4) 施設環境	9		
	5) 出産スタイルの選択	8		
	6) 継続した関わり	7		
	① 妊産褥婦への継続した関わり	(4)		
	② 世代を超えた継続した関わり	(3)		
	7) 助産所での出産	5		
	8) よりよい生活のための援助	5		
	9) 最小限の医療行為	5		
	10) 自然分娩	3		
	11) 母親の相談の場	3		
	12) 費用	3		
13) 助産所の現状	1			
5. 保育所の機能 67	1) 社会資源としての保育所	27		
	① 制度・体制	(17)		
	② 個々のニーズに沿った選択	(8)		
	③ 保育所の現状の問題	(2)		
	2) 育児支援	11		
	3) 地域との触れ合い	9		
	4) 自立や健康な生活を促す	8		
	5) 親に代わって保育する	7		
	6) 母子との交流	5		
	6. 個別性を配慮した関わり 42	1) 助産所における個別性を配慮した関わり	29	
		① 生活に密着した個別性	(18)	
		② ニーズに合わせた個別性	(6)	
		③ 家族を配慮した個別性	(5)	
		2) 保育所における個別性を配慮した関わり	8	
① 個別性を配慮した子どもへの関わり		(5)		
② 個別性を配慮した母親への関わり		(3)		
3) 個別性重視		5		
7. 地域の中の施設の役割 27		1) 継続的な関わり	7	
		2) 他施設との連携	6	
		3) 交流の場	5	
		4) 病院の中の子どもと母親の状況	5	
		5) 施設の特性を活かす	2	
		6) 他施設の人々との信頼関係	2	
8. 専門職の役割 26	1) 専門職としての子育て支援	18		
	2) 対象者理解のための取り組み	4		
	3) 社会環境の理解	3		
	4) 栄養士さんの役割	1		
9. 病院との比較 22	1) 病院の特徴	12		
	2) 病院との違い	10		
10. 地域で支えあう 22	1) 地域で生活する子どもと家族への援助	11		
	2) 学びあう	6		
	3) 話せる場が必要	5		
11. 母親の育児不安 22	1) 育児不安がある	14		
	2) 母親の孤立とその支援	5		
	3) 子への思い	3		
12. 看護者の役割 14	1) 保育所での看護師の役割	9		
	2) 地域の中での看護者の役割	5		

る必要があるということが本研究の動機になっている。

初めに「在宅看護学実習Ⅱ」の科目の概要について述べる。「在宅看護学実習Ⅱ」は1単位(45時間)で設定されており、3年次通年で各グループが1週間ずつローテーションによって履修する。「在宅看護学実習Ⅱ」のねらいは、「地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護を学ぶこと」である。期間中、助産所1日と保育所2日間の施設実習を計画しており、実習最終日は学内において「在宅看護学実習Ⅱ」のまとめをしている。

今回のデータから、「在宅看護学実習Ⅱ」における個々の学生の気づきや理解の内容として、12のカテゴリーに分類された。そのカテゴリー分類結果をもとに、2つの地域施設における実習を通じた学生の学びの分析と、「在宅看護学実習Ⅱ」の目指している実習のねらいが達成されたかどうかの視点で考察する。

#### 1. 2つの地域施設実習を通じた学生の学び

保育所と助産所の施設実習を体験したことによる学びの中心は、各々の施設の果たしている機能と、そこで働く専門職としての保育士と助産師の果たしている役割、そして、その施設を利用している看護援助の対象者である乳幼児とその母親や家族の理解とその人達との関わり方に関する気づきであった。

最も項目数の多かったカテゴリーは【保育士の役割】であり、保育士の中心的な役割を家族と一緒に子育てすることという捉え方で理解していた。普段、関わりが少ない保育士や乳幼児期の子ども達と、2日間実習で生活を共にすることで、新鮮な発見や学びがあり、今まで接したことがない保育士の役割について理解が深まった結果だといえる。そして、サブカテゴリーの「親との情報の共有」や乳幼児の日常生活の自立のための「しつけをする」、「成長発達に応じた関わり」などを重要な役割として捉えていることから、保育所の中の子ども達や送迎時の親と関わる保育士の様子から、子どもの保育をするためには、その家族と関わるのが大切であることも理解できていると思われる。保育士が毎日の親との情報交換や子どもの養育に関わりながら、親と子どもの成長発達を視野に入れて個々に関わりを工夫していることが学べたといえる。

二つ目のカテゴリーは【子どもの理解】であり、

日頃乳幼児と接する機会の少ない学生にとっては乳幼児期の子どもの特徴の理解が大きい学びだったことがわかった。病院実習で関わる入院中の子どもの中には、病気による苦痛に加え、突然の環境の変化で戸惑っており、コミュニケーションもうまく取れず、本来の子どもの特徴が理解しにくい場合が多い。病棟実習を体験した後に保育所で実習した学生は、子ども達が活発で元気よく物怖じしないことを発見できた。また、病棟実習の前に保育所実習を体験した学生は、本来の子どもを姿を理解し、たとえ病気であっても、子どもらしく生活できるようにする必要があると考える機会になったと思われる。

三つ目のカテゴリーは【助産師の役割】であった。助産師の役割は病院実習においても学ぶことができ、今回の体験から最も項目数の多かったサブカテゴリーは、「妊娠・分娩・産褥期の健康管理」であった。そのコードは、①相談・指導、②家庭訪問、③健康診査で構成されており、病院とは異なった環境である助産所における役割が捉えられていた。また、母親への精神的支援のコードに、①じっくり関わるという、助産所でできるケアの特徴にも気づいており、主には病院の産科病棟の助産師との比較の視点が多く見られた。

4つ目のカテゴリーは【助産所の機能】であり、病院の機能では学べない、小規模だから実践できる助産所の自由な雰囲気の中でのさまざまな機能について気づいていた。特に、助産所が家庭的な雰囲気を持ち、地域に根ざした活動をしていること、家族とともに出産やその後のケアを行なっている継続的な関わりの様子が理解できたといえる。病院実習経験前および経験後の学生も、助産所における妊産褥婦さんとその家族の生活スタイルに合わせた関わりの様子を知り、助産所の機能がいかに優れているかという視点で捉えていた。

5つ目のカテゴリーは【保育所の機能】であり、社会の中で保育所が果たしている社会資源としての存在を捉えた気づきが最も項目数が多く、そのコードは、①制度・体制、②個々のニーズに沿った選択、③保育所の現状の問題で構成されており、福祉施設としての保育所の役割について理解できていた。地域の中の社会資源には他にさまざまなものがある。医療機関とは違う施設の機能の理解を通して、地域で生活する乳幼児と親や家族の支援につながる資源についても理解を深めていく必要がある。

6つ目のカテゴリーは【個別性を配慮した関わり】であり、特に、助産所における個別性についての気づきが最も項目数が多く、そのコードは、①生活に密着した個別性、②ニーズに合わせた個別性、③家族を配慮した個別性で構成されており、助産師と妊産褥婦とその家族との1対1の関係の中での援助を通して、助産師の個別性を大切にしたい関わり方を身近に感じたことによる気づきになっていた。

7つ目のカテゴリーは【地域の中の施設の役割】であり、保育所と助産所を地域の中の子どもと母親のための環境だという捉え方や、地域には他に施設がありその連携によって成り立っているという捉え方、また、病院の施設との関係やその施設で働く人々との信頼関係によって成り立っているという捉え方もできていた。

8つ目のカテゴリーは【専門職の役割】であり、保育士や助産師や看護師という個々の職種の人々の役割という捉え方ではなく、専門職からなる保健医療チームの役割が捉えられていた。特に項目数が多かったのは「専門職としての子育て支援」であり、妊産褥婦および乳幼児とその家族への援助について、地域の中で専門職が担っていかねばならない役割について考えられたといえる。

9つ目のカテゴリーは【病院との比較】であり、それまで病院実習で学んだ病院の機能や役割を振り返り、今回体験した助産所との対比をしたものであった。助産所では対象者にじっくり関わっているということや、個々のニーズに具体的に対応していることなどを知ることによって、病院より助産所の方がよいと判断したものであった。それぞれの施設には各々の機能と役割があるので、それを多面的に捉えて考えていく必要がある。

10番目のカテゴリーは【地域で支えあう】であり、保育所と助産所の存在を通して、家庭を基盤とした地域で生活する人々の理解が深まったことがわかる。つまり、保育所に通っている乳幼児とその家族や、助産所を利用している妊産褥婦とその家族という人々だけでなく、地域全体で、子どもを育てている妊産褥婦とその家族を支えていくことと、そのことによって自分も学んでいけるという視点が感じ取れた。

11番目のカテゴリーは【母親の育児不安】であり、妊娠・出産・子育て中の母親の大変さや母親の抱く思いについての気づきや、支援を求めている実態を知ったという気づきであった。妊娠・

出産・産後の経過の中で、そして、保育所に子どもを通わせている母親が、今まさに感じている育児に対する不安は病院の中で関わる場合より、より生活に密着した具体的な内容の不安を理解する体験になったといえる。

12番目のカテゴリーは【看護者の役割】であり、保育所は乳児が規定人数以上在籍していれば看護師が必要なことや、乳幼児期の子どもは体調が変化しやすく、看護の視点で子どもを見る必要性も求められるので、看護師の役割に関する気づきがあったと思われる。一方、助産所は助産師が中心になって役割を果たしている施設であることから、施設の中で看護者の役割を果たすというより、地域の中には看護の専門知識を持って働きかける看護者が必要だという学びになっていた。それぞれの職種の役割を考えるのではなく、地域の中で看護の果たす役割を捉えつつ、看護師として何が求められているかを理解させていく必要がある。

以上、12のカテゴリーに分類されたデータは、1日間の助産所実習、2日間の保育所実習を通して、それぞれの気づきや理解したことについて学生が個々に記述したものである。つまり、学生一人ひとりが体験を通して、自分の目で見て、聞いて、感じ取ってきた学びであるといえる。その個々の学びを分析した結果、乳幼児とその母親と家族の理解、そして、それらの対象者と関わる保育士や助産師の役割、また、保育所、助産所、病院などの施設の機能などについてなど幅広い学びが得られたことがわかった。

## 2. 「在宅看護学実習Ⅱ」の目指している実習のねらいが達成されたか

12のカテゴリーに分類できた学生の学びについて、「地域で生活する妊産褥婦及び乳幼児とその家族への看護を学ぶ」という「在宅看護学実習Ⅱ」の目指している実習のねらいが達成できたかどうかという視点で考察する。まず、得られたカテゴリーを図1に示す。実習を体験して得た学びの多くは、実際に関わった保育士や助産師の役割、保育所や助産所の施設の機能に関するものであった。そして、その両者の専門職の役割や機能を通して、援助の対象者である乳幼児とその母親や家族との関わり方を理解した記述も見られた。また、項目数は少なかったが、地域で生活する人々と施設の果たす役割の理解や、地域の中で専門職が果

たす役割、地域で支え合うことの大切さに関するカテゴリーも認められた。つまり、地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護を学ぶという実習目的達成のための施設として、保育所と助産所を今後も活用できることがわかった。

以上のように、学生の学びや気づきは広範にわたるが、個々に見れば偏りも見られる。これを補うためには学生間での共有が必要である。本カリキュラムでは、グループ全員によるカンファレンスとまとめの資料作成を行っているが、これをいかに展開すればより視野を広げていくことが出来るかを考えることが重要だと考えた。

学生は、保育所と助産所の機能と役割、妊産褥婦と子ども達の理解を通して個別性の大切さも学んでおり、その2つの施設を中心にして、個々の子どもと母親、家族の状況により専門職としての関わり方に工夫が必要であることや、地域の人々の支えあいについても思考を広げようとしていた。

これらのことから、「地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護」の理解に重要な、地域全体を視野に入れた対象者の理解と、個々の妊産褥婦および乳幼児とその家族の理解という2つの視点の学びがあったことがわかった。つまり、地域で生活する対象者を全人的に理解するためには、地域の中で実際に対象者に触れ、体験し、関わる実習の果たす意義は大きく、さまざまな視

点の気づきにつながっていることがわかった。

妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護は、家族というシステムの中で捉えて、対象者の発達段階に合わせて考えていくことが重要であり、小児看護学領域と母性看護学領域の学習を関連づけて進めることが効果的だといえる。特に、地域で生活する人たちへの支援についての理解は、眼前の対象者の状況だけを捉えて考えるだけでは不十分で、視野の広い思考過程が求められる。そのため、学年の進行に合わせて、段階的にどのような連携をとって教育カリキュラムを組み立てればよいか、両領域の十分な話し合いと具体的検討が必要である。

これまで、本学の小児看護学領域と母性看護学領域の学習指導は、1年次の小児看護学概論及び母性看護学概論、2年次の小児臨床看護論および母性臨床看護論の学習過程においても合同授業の試みを実践し、小児看護学と母性看護学両方の視点で、妊産褥婦及び乳幼児とその家族への看護について学ぶ機会を作ってきた<sup>1)</sup>。その結果として、小児看護学と母性看護学両方の担当者が関わることによって、「在宅看護学実習Ⅱ」の気づきや学びにつながったのではないかと考える。黒野らの、地域看護領域も含めて3領域で合同授業を実施した試みの報告<sup>2-3)</sup>では、母性・小児・地域看護学領域の関連性の認識が高められたとして

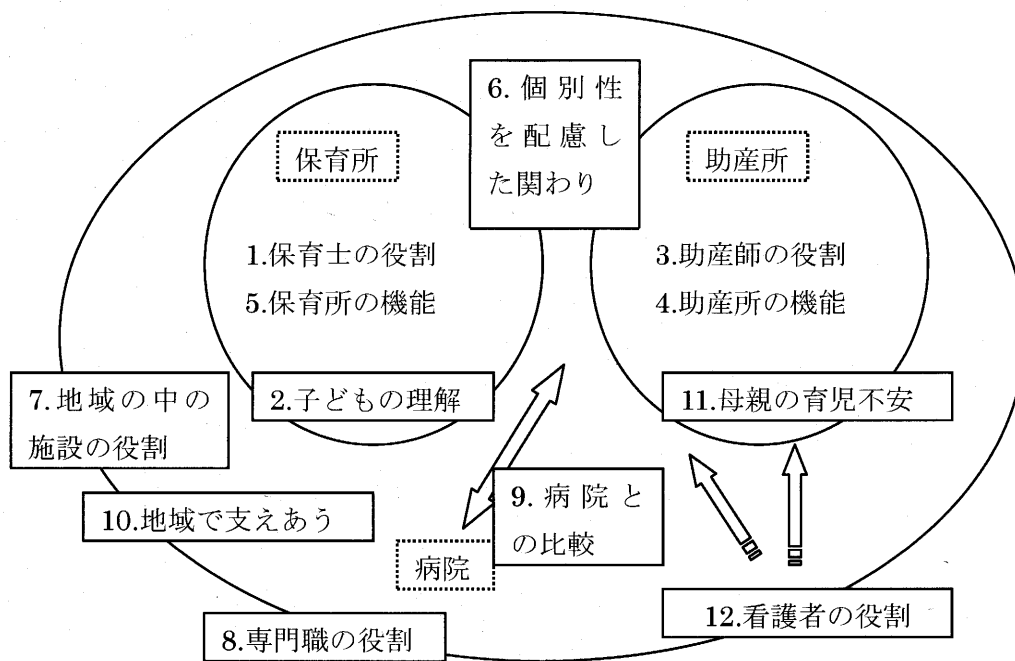


図1 地域の中の人々と施設の理解及び看護援助

いる。限られた時間の授業計画は、各々の科目の内容を確認し、どの部分を合同で行なうかという事前の検討と準備が必要であり、きめ細かい計画と配慮を行なうことによって、より効果的な授業実践になるといえる。

### 今後の課題

今回の研究データは、地域の医療及び福祉に関する施設の実習体験から、個々の学生が学んできた気づきを分析したものであり、実習最終日のグループカンファレンスとまとめの学習の成果は含んでいない。しかし、2つの地域施設の実習を通して、全体的には、「在宅看護学実習Ⅱ」の目的の達成につながる学生の気づきがあったことが明らかになった。今後、引き続いて、地域で生活する妊産褥婦および乳幼児とその家族への看護の理解について、小児看護学領域と母性看護学領域の

両方から検討を継続し、看護者としての援助のあり方について理解を深めていく必要がある。

### 引用文献

- 1) 舟越和代, 松村恵子, 榮玲子, 小川佳代, 三浦浩美 (2004) 母性看護学概論と小児看護学概論における学生の学び—小論文テーマの分析—. 香川県立保健医療大学紀要 1: 129 - 174.
- 2) 黒野智子, 多田奈津子, 宮谷恵, 入江晶子 (2002) 母性・小児・地域看護領域の合同授業の試み. 聖隷クリストファー看護大学紀要 10: 149 - 155.
- 3) 黒野智子, 多田奈津子, 宮谷恵, 入江晶子, 小出扶美子 (2003) 母性・小児・地域看護領域の合同授業の試み (第2報). 聖隷クリストファー看護大学紀要 11: 101 - 109.

---

受付日 2005年10月31日